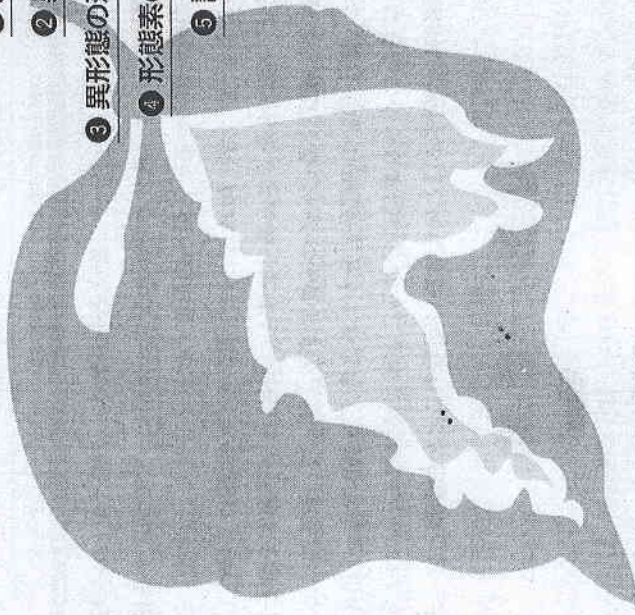


第3章

形態論

- ① 形態素
- ② 異形態
- ③ 異形態の現れ方
- ④ 形態素の分類
- ⑤ 語形成



この章では、「形態素」という単位の定義とその設定の方法、その分類を中心に解説します。これまで「単語」と言われてきた単位とは違うものであることに注意して下さい。

1 形態素

POINT

- 最小の記号を形態素という。
- 単語は1つ以上の形態素から構成される。

1 形態素

「川」や「学校」、「話す」や「変える」、「大きい」や「美しい」などの記号は、単語(あるいは「語」と呼ばれます。単語は、文を構成する単位ですが、意味の観点からすると、最小の単位とは言えません。「学校」という語を見てみましょう。「学」/gaku/という漢字を含む単語は「学生」「学事」「大学」など、他にもたくさんありますし、「校」という漢字を含む単語も、「高校」「校舎」「校正」などいくつもがあります。従って、意味的には、「学校」は「学」と「校」の2つの部分に分かれると考えべきです。しかし、「学」や「校」はさらに小さな単位に分けることはできません。このような、それ以上意味的に分割することのできない記号のことを形態素と言います。



「川」/kawa/は、/ka/と/wa/という2つの音節に分かれ、日本語には「蚊」や「輪」という単語があります。「蚊」も「輪」もさらに2つづつの音素に分けることはできませんが、/k/や/w/という子音、半母音だけを能記としてもつ記号は、日本語には存在しませんから、「蚊」「輪」はそれだけで1つの形態素です。さて、「蚊」と「輪」の意味を合成して「川」の意味にすることは不可能です。従って、「川」は、さらに小さな記号に分割することはできないことになり、やはり1つの形態素だということになります。

2 単語と形態素

「川」「蚊」「輪」などの単語は、1つの形態素でもあります。それでは、「話す」「大きい」などの単語はどうでしょうか。日本語の動詞や形容詞は活用します。それぞれの単語の活用表を見てみましょう(後の説明のために、音素表記にしておきます)。

	話す	大きい
未然形	hanasa/hanaso	ookiku/ookikaro
連用形	hanasi	ookiku/ookikakaQ
終止形	hanasu	ookii
連体形	hanasu	ookii
仮定形	hanase	ookikere
命令形	hanase	

活用する単語については、活用形を通じて不変の部分を語幹、変化する部分を(活用)語尾と言います。つまり、日本語の動詞や形容詞などの単語は語幹+(活用)語尾という構造をもっているわけです。

「話す」については、/hanas/までが各活用形について共通ですから、これを語幹と見なすことができます。同様に、「大きい」の語幹は、/ooki/となります。/hanas/、/ooki/は、さらに小さな記号に分けることができます。んから、これで1つの形態素です。また、/a/、/i/、/u/などは動詞の(活用)語尾、/ku/、/i/、/kere/などは、形容詞の(活用)語尾であって、それぞれ1つの形態素を構成します。

以上のことから、単語は、それだけで1つの形態素である場合と、複数の形態素から成る場合の2通りがあることがわかります。

2 異形態

POINT

- 形態素は、意味は同じだが能記の異なる複数の異形態から構成されることがある。

1 形態素と異形態

「風」という単語は、これ以上小さな形態素に分けることはできませんが、「大風」「そよ風」など、他の単語を構成する成分となることがあります。「大風」「そよ風」ならば、能記はいずれも/kaze/です。ところが、「風下」「風上」「風穴」などの場合は、/kaza/という能記をもちます。/kaze/であれ、/kaza/であれ、意味は同じですから、これらは同じ1つの形態素に属すると見なすことができます。このような場合、「風」という形態素に、/kaze/と/kaza/という2つの異形態があると言います。これは、1つの音素が複数の異音から成るとするのと、同様の考え方です。ある記号のことを問題にするとき、それが形態素のレベルなのか、それとも異形態のレベルなのかを明確に区別する必要のないときには、単に形態と呼ぶこともあります。

表記の上では、形態素を | | で囲んで、{kaze} のように表し、異形態を /kaze~kaza/ のように表します。形態素は |風|、|かぜ| のように音素表記をしない場合もありますが、異形態をもつ時には、特にその能記の違いが問題となりますので、音素表記をしたほうが適当です。

「イヌ」「ネコ」「虫」など、母音や鼻音で始まる名詞には異形態がないことが多いのですが、「川」「島」「箱」などの無声閉鎖音や無声摩擦音で始まる名詞は、「小川」/ogawa/、「小島」/kozima/、「筆箱」/hudebako/ のように、他の形態に先行されている場合に、先頭の子音が有声化した異形態 (/gawa/, /zima/, /bako/) をもつこともあります。いわゆる連濁によって、形態素の先頭の無声子音が有声化することによって生じた異形態です。

2 文法的な働きをする形態素

過去の助動詞「た」({ta}) には、「話した」「歩いた」と「飲んだ」「死んだ」を比べてみればわかるように、/ta/と/da/という異形態があります。それでは、「話す」「歩く」と「見える」「消える」を比べてみましょう。「話す」「歩く」は、hanas-u、aruk-u のように分けられますし、「見える」「消える」は、mie-ru、kie-ru のように分けられます。/u/, /ru/は{ta}と対立して、現在または未来、すなわち「非過去」を意味しますから、日本語には非過去を意味する時制形態の/u/と/ru/があるとすることができます。/u/と/ru/の意味は同じですから、1つの形態素に属することになります。この場合、2つの異形態のうち、どちらかを選んでは代表させるのですが、次節で詳しく述べるように、異形態の交替をうまく説明できるものを選ぶのが適当で、/u/と/ru/については、/ru/のほうを選んで、形態素{ru}を設定します。

{ta}や{ru}という形態素は、用いられる場合には、必ず他の形態素が先行している必要があるため、このことを明示するために、{-ta}や{-ru}のよう前にハイフンを置いて表記されるのが普通です。

{-ru}という形態素を認めるとすれば、受け身・可能・尊敬・自発の助動詞「れる／られる」、使役の助動詞「せる／させる」の終止形は、2つの形態素から成ることになります。語幹部分は、それぞれ/re/・/rare/、/se/・/sase/ のような形態として現れますから、形態素としては、{-rare-}、{-sase-} のように表現することができます。この語幹の形態素こそが、これらの助動詞の意味の中心を担う部分なのであり、「る」({-ru}) の部分は、それがどの時制なのかを表す働きをしていると考えるのが適当です。

③ 異形態の現れ方

POINT

- 形態素の異形態を規定するのは、音韻的な条件による場合と、前後の形態による場合の2通りがある。

① 音韻的な条件による異形態

日本語の非過去時制の形態素{-ru}の異形態/-u/、/-ru/の現れ方を見てみましょう。

- /-u/ kak-u (書く)、hanas-u (話す)、kat-u/kac-u (勝つ)、sin-u (死ぬ)、
nom-u (飲む)、tor-u (取る)、kog-u (漕ぐ)、tob-u (飛ぶ)
- /-ru/ mi-ru (見る)、mie-ru (見える)

/-u/は動詞の語幹が子音で終わる場合に現れ、/-ru/は語幹が母音で終わる場合に現れることがわかります。

それでは、過去時制の形態素{-ta}の異形態/-ta/、/-da/はどうでしょうか。

- /-ta/ kai-ta (書いた)、hanasi-ta (話した)、kaQ-ta (勝った)、toQ-ta (取った)、
mi-ta (見た)、mie-ta (見えた)
- /-da/ sin-da (死んだ)、non-da (飲んだ)、koi-da (漕いだ)、ton-da (飛んだ)

/Q/の後は/-ta/、/N/の後は/-da/になることは確かですが、/i/の後は両方が現れています。従って、直前の音素によって出現が条件づけられるのではないようです。これは、{-ta}が動詞の連用形に後続する場合に、音便が起きるためだと考えられます。実は、音便とは、次の例を見てもわかるように、{-ta} (あるいは{-te})が連用形に後続するときに、/i-/が脱落する現象です。

kat-i-ta>kat-ta/kaQta/、tor-i-ta>tor-ta/toQta/

ですから、/-ta/と/-da/の出現は、語幹母音によって規定されるところが適当です。語幹母音が/n, m, g, b/で終わる場合には/-da/、それ以外の場

の場合には/-ta/となると考えるのがよいでしょう。
形態素の異形態が、異なった環境で出現することを異形態の交替と言います。

② 前後の形態による異形態

日本語の「雨」{ame}は、/ame/と/ama/という異形態をもち、後に形態が続かない場合には/ame/となりますが、そうでない場合には/ame/と/ama/の両方が現れます。

- /ama/ 雨脚/ama-asi/、雨傘/ama-gasa/、雨漏り/ama-mori/
/ame/ 雨上がリ/ame-agari/、雨がち/ame-gati/、雨模様/ame-mojoo/

上の例は、後続する母音の種類によって「雨」の異形態の現れ方が条件づけられるのではなく、後続する形態がどれであるかによって、異形態が交替することを示しています。

「草」{kusa}も、/kusa/と/gusa/という異形態がありますが、複合語の後部成分となる場合に、連濁を起こすか起こさないかは、音韻的な条件によるものではありません。

- /-kusa/ 下草/sita-kusa/、蓮草/mici-kusa/
/-gusa/ 忘れな草/wasuruna-gusa/、宵待ち草/joimaci-gusa/

4 形態素の分類

POINT

- 品詞は単語を形態・文法的特徴に従って分類したもの。
- 形態素は、自由形態素と拘束形態素、内容形態素（語根）と機能形態素（接辞）などに分類される。

1 品詞

名詞、動詞、形容詞などの品詞は、「傘立て」が名詞、「消える」が動詞、「大きい」が形容詞に分類されることからわかるように、単語を分類したものです。これらの単語は、さらにいくつかの形態素から構成されています。

傘立て：kasa-tat-e、消える：kie-ru、大きい：ooki-i

品詞は、単語を主として形態や文法的な特徴に従って分類したもので、日本語の主要な品詞は、概ね次のように定義できます。

名詞：活用しない。文の主語や目的語となったり、述語句の主要成分となる。「この」「その」「あの」などの指示詞が先行することができる。

動詞：活用し、終止形（＝非過去形）がruまたはru_uで終わる。述語句の主要成分となる。

形容詞：活用し、終止形（＝非過去形）がi_uで終わる。述語句の主要成分となる。

副詞：活用しない。文・動詞・形容詞・他の副詞を修飾する。

助動詞：活用し、動詞・形容詞に後続して時制・モダリティなどの意味を表す。

助詞：活用しない。名詞に後続して意味役割を表したり、述語句の成分となって対比・とりたて・接続など様々の機能を果たす。

2 形態素の分類

形態素は、他の形態素との関係およびその表す意味によって次のように分類されます。

●自由形態素と拘束形態素

単独でも文を構成することができる形態素を自由形態素と言います。文は、通常ならば最低でも「名詞句＋述語句」という2つの成分を必要とするのですが、例えば「太郎は何を食べたの」という質問に対する返答の文としては、「リンゴ」という名詞だけの文でも十分です。これは、質問された文を手がかりに「太郎はリンゴを食べた」という完全な文を復元することができるところです。

このように、不足する成分があっても、与えられた状況を手がかりに完全な文にすることができるとして「文」ということにすれば、「リンゴ」という名詞は1つの形態素ですから、この形態素は単独で文を構成することができると見なされます。「もつと」や「しつかり」などの副詞も、具体的な状況で使用されたのであれば、「もつと水をくれ」とか「しつかりやりなさい」などの文と同じ意味を表すものとしてとらえられます。従って、1つの形態素から成る副詞も自由形態素です。

一方、単独では文を構成できず、必ず他の形態素と一緒にしなければ文を構成できない形態素を拘束形態素と言います。「太郎はリンゴを食べたか」という質問に対して「食べた」という動詞だけの文で返答することは可能ですが、「食べた」はtabe-taという2つの形態素から成っていて、動詞語幹の形態素{tabe-}や、過去の助動詞{-ta}だけでは文になりませんから、動詞語幹や過去の助動詞は、拘束形態素に分類されます。同じように、あるものを見て「大きい!」という文を使用することはできませんが、「大きい」もooki-iのように2つの形態素から成っていますから、形容詞語幹および形容詞の終止形の形態素も拘束形態素です。一般に、助動詞語幹や助詞は、国文法で「付属語」と呼ばれることからわかるように、やはり拘束形態素

KEYWORD

名詞／動詞／形容詞／自由形態素／拘束形態素

に属します。

日本語は、主要な品詞である動詞・形容詞・助動詞が活用して語幹と語尾に分かれ、いずれも拘束形態素ですから、拘束形態素の多い言語であると言えます。さらに、「事典」の「事」{zi}と「典」{ten}などのように、漢語の構成要素となる形態素も（漢語の造語成分）、単独で文となることはできませんから拘束形態素であり、これを含めれば日本語の拘束形態素の数は極めて多くなります。

● 内容形態素と機能形態素

名詞や動詞・形容詞語幹、副詞など、個別的な内容を表す形態素を内容形態素、助詞や助動詞語幹など、文法的な機能をもつ形態素を機能形態素と言います。

「内容」があるとはどのようなことを意味しているのでしょうか。「川」という形態素のことを考えてみましょう。この形態素は、「川である個体の集合」を指示しています。つまり、世界に存在するすべての個体の集合の一部である、川の集合を指しているわけです。動詞「笑う」の語幹である形態素{waraw-}ならば、これは、「ある時にある場所である誰かが笑う」という事態の集合を指しています。この場合も、世界で生じるすべての事態の集合のうちの一部を指していることになります。このように、内容形態素の指示する集合は、世界にある個体や事態のうちの一部を成す集合であると考えることができます。

一方、「が」や「を」などの助詞であれば、それは意味役割を表すのですから、世界にある個体や事態すべての集合について、それがどの意味役割であるかを表示することになります。また、{-ru}、{-ta}、{-te}のような時制形態素であれば、世界で生じるすべての事態について、それがどの時点で起きたのかを表しています。従って、文法的機能を表す形態素は、世界にある個体や事態の集合すべてについての性質を表すものです。

日本語の内容形態素としては、名詞、漢語の造語成分の多く、動詞・形容詞語幹、副詞などがあり、機能形態素としては、助詞、助動詞語幹、時制形態素などがあります。

なお、拘束形態素でありかつ機能形態素であるもの、日本語であれば助詞や助動詞語幹、時制形態素などを、接辞と呼びます。接辞のうち、他の形態素の前に置かれるものを接頭辞、後に置かれるものを接尾辞と言います。日本語の助詞や助動詞語幹は接尾辞であり、「お米」の「お」、「す足」の「す」などが接頭辞になります。

5 語形成

POINT

- 新しい単語を作る方法を語形成という。
- 内容形態素に接辞を付ける方法を派生、内容形態素を2つ以上並列する方法を複合という。

① 語形成

「お箸」という単語は、「箸」という名詞に「お」という接頭辞が付いて作られたものです。また、「谷川」という名詞は、「谷」と「川」という2つの名詞を組み合わせて作られています。このように、新しい単語を作るための方法を語形成と言います。語形成の方法としては、「お箸」のように接辞を使用する場合や、「谷川」のように接辞を使用しないで内容形態素を組み合わせる場合が代表的ですが、その他にも、「テレビ」のように長い単語を短くしたもの、NHKのように頭文字を並べたものなどがあります。

② 派生

「内容形態素+接辞」という構造をもつ単語を作る方法を、派生と言います。その結果作られた単語を派生語と言います。日本語には、次のような種類の派生語があります。

接頭辞+内容形態素

- お+名詞：お箸、お米、お車、お手紙
- ご+名詞：ご本、ご依頼、ご祝辞、ご指導
- す+名詞：す足、す手、す顔、す焼き、す泊まり
- ま+名詞：ま水、ま心、ま北、ま人間
- か+形容詞：か細い、か弱い
- こ+形容詞：こやかましい、こうるさい、こぎたない
- すっ+動詞：すっどばす、すっどぼける、すっどぼかす

内容形態素+接尾辞

形容詞語幹+さ：暑さ、寒さ、広さ、高さ

形容詞語幹+み：厚み、深み、高み

名詞+する：運動する、変化する、沸騰する、冷凍する

名詞+的：抽象的、行動的、批判的、プラトンの

ある接辞を使用して、新しい単語を作る可能性がどの程度であるかを、その接辞の生産性と言います。接尾辞「する」は、位置や状態の変化を意味する名詞の多くについて動詞を作ることができますし、最近では「ヤンキーする」「芸能人する」「とらば一ゆする」などの変化を意味しない名詞からも動詞を作る例が見られるため、生産性は高いと考えられます。生産性が高いことを生得的と言います。

一方、日本語の接頭辞の多くは、生産性の低いものが多いようです。「す」や「こ」に比べると「お」はたくさんの派生名詞を作ることができますが、それでも「おテレビ」や「お飛行機」などの単語はありえませんが、やはり生産性には限度があります。

③ 複合

内容形態素を2つ以上使用して新しい単語を作る方法を複合または合成と言います。その結果作られた単語を複合語または合成語と言います。

日本語の複合語には、「本箱」(名詞+名詞)のように内容形態素だけを並列して作られるものと、「爪切り」(名詞+動詞語幹+連用形語尾)、「押し出す」(動詞語幹+連用形語尾+動詞語幹+時制形態素)のように、接辞が含まれるものの2種類があります。

内容形態素のみ

名詞+名詞：窓枠、雨傘、ガラス戸、船歌

内容形態素と接辞

名詞+動詞：雨降り、栓ぬき、東京行き、日替わり、一気飲み

動詞+名詞：回り舞台、焼き魚、変わり身、飲み友だち

KEYWORD

語形成/派生/派生語/生産性/生産的/複合/合成/複合語/合成語

動詞＋動詞（→動詞）：押し倒す、突き出す、叩き割る、走り回る

動詞＋動詞（→名詞）：立ち食い、行き帰り、生き埋め、崩し書き

日本語の複合語の成分として、和語が用いられる場合には、その数は2つであるのがほとんどです。3つ以上用いられる例は、「走り高飛び」「立ち食いそば」「とけ抜き地蔵」「積み木くずし」などがありますが、あまり多くはありません。一方、成分が漢語であれば、それをいくつでも並列させて、次のようにいくつでも長い複合語を作ることができます。

自由平和党政策倫理綱領作成委員会副委員長事務室

④ その他の語形成の方法

「テレビ」は「テレビジョン」の最初の3モーラだけを残して、後を切り捨てることによって作られた単語です。このように、単語の一部だけを残して新しい単語を作る方法を刈り込みと言います。また、「NHK」は、「日本放送協会」をローマ字で表した、Nippon Hoso Kyokaiの各単語の頭文字を並べて作られた単語で、このような単語のことを頭字語と言います。

刈り込み

プロ←プロフエッシュヨナル、アポ←アポイントメント、ネガ←ネガティブ
ばんきょう←一般教養、音大←音楽大学、微積←微分積分、一通←方通行

頭字語

PR←public relations、OB←old boy、WC←water closet